

きょうは、十五夜です。



革羽織に描かれた満月

江戸のほとんどもを焼き尽くしたと言われる明暦^{めいれき}の大火。

火災が多かった江戸時代、

「燻技法」によって作られた重量感あふれる革羽織は、火の粉をかぶつても、燃えにくかったこともあり、火事現場で、火消が着用したといわれています。

災害の多い現代にも通じるような印伝の逸話です。

革羽織は、市民には防寒具として使用され、明治時代にかけて、鳶職の頭や棟梁などが着用、歳の市には、粋に着飾って出掛けたそうです。

満月が描かれた「月波車燻革羽織」。

今宵は十五夜です。
夜空を見上げてみませんか。



「月波車燻革羽織」
印傳博物館所蔵

印傳屋は「第77回 正倉院展」※に協賛いたします

印傳屋が受け継ぐ鹿革工芸「甲州印伝」の系譜をたどると、さまざまな文化が華開いた奈良時代にたどり着きます。
東大寺には、鹿革を用いた国宝「^{ぶどうからくさもんそめかれ}葡萄唐草文染革」が今に伝わり、御物が収められる正倉院にも鹿革の履や馬鞍などが現存しています。
正倉院に収められている日本の革工芸の源流にある品々を含め、奈良時代の日本の技の粋を集めてつくられた貴重な歴史資料が、
いつまでも後世に伝わってゆくことを印傳屋は願っています。

※「第77回 正倉院展」 2025年 10月25日(土)～11月10日(月) 会期中無休 【主催・会場】奈良国立博物館 【特別協力】読売新聞社